

第39回 岡倉天心記念 がん哲学外来 巣鴨カフェ「桜」

令和4年9月10日

言葉の处方箋

いい覚悟で生きる 樋野 興夫 P86

孤独を友としましよう

孤独は恐れるものではありません。

むしろ、孤独を好み、孤独の中で静思しましよう。

がんの告知を受けたとき、人はなぜかそこで人生の時間を切ってしまうような傾向があります。きっと世の中の誰からも見放され、ひとりで死に向かって歩いて行くような、なんともいえない孤独感に包まれるのではないか。

それはたまらなくつらい時間です。でも、言葉を換えれば、孤独だからこそ考える時間は十分にあります。考えて、さらに考えていけばその先にはきっと、これから生きていく上で自分に与えられた役割がふと浮かんでくるはずです。

誰かと四六時中しゃべったり、がん治療に関するあらゆる情報を収集したりして東奔西走すれば、気はまぎれたり、手つ取り早くなんらかのアドバイスがもらえるかもしれません。それはそれで悪いことではありません。

それでも、眠りにつくころになればひとりにならざるをえないでしょう。

「夜、ひとりになったとき、どうしても死を考えてしまうんです。こんな苦しみがいつまで続くのですか。いつも、死んだほうがましだと思います」と言つた患者さんもいれば、

「周りのみんながおしゃべりして笑っている。でも、私は笑えない。たまらなく寂しいです」

と言つた患者さんもいます。私は、言います。

「人はしよせん、ひとりですよ。孤独を友としましよう」

そして、続けました。

「ひとりの孤独な時間があるから、このがん哲学外来のメディカルカフェで隣り合った人のおしゃべりを聞いたり、自己紹介をしたり、そんなふつうの

時間が楽しい時間になるんじゃありませんか」

私が言う孤独とは、ひとりで深く考えるという意味を持つソリチュード (solitude) であって、寂しさを意味するロンリネス (loneliness) ではありません。単なるひとりぼっちの寂しさではなく、より深く静思するための孤独なのです。

がんだけではありません。病気のときだけではありません。孤独を感じることは、日々さまざまな場面であるはずです。そのとき、孤独とは立ち止まる時間と考えてみてはどうでしょう。立ち止まり、焦る思いや寂しさをクールダウンすることで、あらためて気づいたり感じたりすることがあると思います。

孤独と思索は背中合わせのようなものです。どうか、孤独を恐れず、孤独に甘んじるくせをつけてほしい、と孤独の中で育った私は思います。

私は島根県の小さな村に生まれ育ちました。小さな村ですから、おもちゃ屋も書店もない、都会と比べたら寂しい土地でした。学校には友だちも先生もいましたが、放課後にはひとりになります。ひとりでいることが当たり前でした。

坂の途中で、家の裏手の山で、海辺で、ひとり立ち止まつては、何かを考えていました。

ひとりで、孤独に甘んじて考える。この体験がなかつたら、私は「がん哲学」などということを思いつかなかつたろうな、と、ふるさとの島根県大社町、鵜崎(現・出雲市)の地へ思いをはせるのです。

そもそも、私が病理学を専門としたのは、どこかに出雲地方の言葉のコンプレックスがあったからです。病理学なら一日のほとんどを顕微鏡をのぞいていればいい、そう思ったのです。臨床医と違って患者さんと話さなくてすみますからね。つまり、すんぐ孤独になる道を選びました。

そんな私が、今やがん哲学外来をきっかけに、多くの人々を前に講演をしたり、対話をしたりしている。人生とは、なんとも不思議なものです。

次回は10月8日(土)です

